

多面的・多角的なものの見方・考え方のできる生徒を育てる国語科学習指導 ～納得できる根拠をもとにつくるディベート活動を通して～

要約

情報化の進む現代においては、紙媒体で情報を手に入れるよりも、テレビやインターネット等の電子媒体から必要な情報を手に入れる機会が増えてきている。それに伴い、子どもにとって言葉を取り巻く環境が変化してきている。膨大な情報の中から自分にとって必要な情報を適切に読み取り、選択できる能力が子どもたちに求められている。また、国語科学習指導要領の目標に掲げられている「伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」ためには、相手の考えを正確に捉えそれを解釈したうえで相手に自分の考えを適切に表現することが必要になる。そのためにはまず、相手の考えを正確に読み取らなければならない。以上のことにより、本研究の主題を「読むこと」の力の育成に定めた。

そこで、2年生の国語科における「読むこと」の学習指導において、肯定側、否定側両方の根拠を考えるワークシートを用いてディベート活動を行い、それぞれの考えを深めれば、自分が文章から読み取った一つの出来事に対して、「これは本当にこのような意味なのだろうか」や「なぜこのような意味になっているのだろうか」と色々な方面から考えることができる生徒になるであろうと考えた。検証の方法として、国語科における「読むこと」に関する授業において、ディベート活動の場を設けた。そのディベート活動において、「興味・関心をもって取り組むことができたか」ということと、「一つの出来事に対して『これは本当にこのような意味なのだろうか』や『なぜこのような意味になっているのだろうか』と色々な見方をすることができたか」という2点について、ディベート活動振り返りシートを用いて分析した。

2回の検証授業を通して、生徒たちのディベート活動に対する意欲が高まってきた。1回目のディベート活動を通して、ディベート活動の自分が思いつかなかった根拠を聞くことができるというおもしろさを生徒自身が感じることはできたからではないかと考える。

本研究を通して、次の成果と課題が明らかになった。

- ディベート活動をすることで、生徒たち自身が協力して色々な根拠を探すことができていた。
- 相手の根拠の正当性について、「本当にそうだろうか」と疑問をもって考えることができていた。
- ディベート活動に対する意欲があがったことにより、自分の意見を言うことに対して抵抗感が少なくなってきた。
- ディベーターの生徒が主に発言をするだけであったので、受け身になっている生徒がいた。そのような生徒を、どのようにしてディベート活動に積極的に参加させていくか、考えていく必要がある。
- どのように論題を設定するかを吟味する必要がある。単元の内容にも関連し、かつ、子どもたちの考えたいという意欲をわかせる論題を設定していきたい。
- 準備や実際のディベート活動、まとめなど、授業時数が必要になってくる。いかに効率よく準備をするのかを、考えていく必要がある。

キーワード 納得できる根拠 ディベート活動

1 主題設定の理由

(1) 社会的要請から

情報化の進む現代においては、紙媒体で情報を手に入れるよりも、テレビやインターネット等の電子媒体から必要な情報を手に入れる機会が増えてきている。それに伴い、子どもにとって言葉を取り巻く環境が変化してきている。膨大な情報の中から自分にとって必要な情報を適切に読み取り、選択できる能力が子どもたちに求められている。

大学入試改革も行われており、7月には高大接続改革の実施方針が策定されたところである。「高校生のための学びの基礎診断」実施方針には、『『義務教育段階の学習内容を含めた高校生に求められる基礎学力の確実な習得』と『それによる高校生の学習意欲の喚起』を図るため』と示されており、義務教育段階で身につけておかなければならない学力の重要性について認識する必要がある。平成29年度の福岡県立高校入試では文章や表、画像から内容を読み取り、それを踏まえて表現する問いが出題された。入試問題の出題内容及び傾向を分析することで、日々の授業で何を身に付けることが求められているかを見出すことができると考える。

(2) 子どもの実態から

本学級の生徒は、自分の考えを積極的に発言する生徒が多く、日々の授業の中で話合いの時間をとるとそのような生徒を中心として、活発に交流する姿が見られている。話合いに対して意欲的な生徒も多く、7月に実施した授業アンケートには「話合いが楽しかった」「話合いの時間をもっとしてほしい」という意見があった。このように話合いに対して意欲はあるのだが、考えが深まる話合いになっているかは疑問が残る。授業の様相を観察していると、話合いの内容や目的が分かった生徒がまだ分かっていない生徒に教えている時間が多く、考えを深めるまでには至っていないように感じる。

また4月に行われたに実力テストによると、本学年の生徒が「読むこと」に対して苦手意識を抱えていることがわかった。話合いは好きだが、話合いの材料となる内容を読み取り、解釈することに対しては苦手意識をもっていると考え。したがって、「読むこと」の学習において内容を読み取り解釈できるようにするためには、理解したことや考えたことを説明したり伝え合ったりする活動を仕組み、話合いの内容を深めていく必要があると考える。

(3) 国語科の目標から

平成29年3月に、新学習指導要領が告示された。新学習指導要領では「学校教育に『子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること』が求められている」と明記されている。それに伴い、国語科では次のように目標を定めている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるように

する。

- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(2) に示されている「伝え合う力を高め、思考力や想像力」を養うためには、相手の考えを正確に捉えたうえで自分の考えを適切に表現することが必要になる。そのためにはまず、相手の考えを正確に読み取らなければならない。以上のことにより、本研究の主題を「読むこと」の力の育成に定めた。

2 主題の意味

主題における「多面的・多角的なものの見方・考え方」とは、「社会的事象を色々なことで見ていくこと」である。これは、中央教育審議会教育課程部会長の無藤隆氏が『学習指導要領改訂のキーワード』で示している。国語科における「多面的・多角的なものの見方・考え方のできる生徒」とは、自分が文章や表現内容から読み取った一つの出来事に対して、「なぜこのような意味になっているのだろうか」や「これは本当にこのような意味なのだろうか」と色々な方面から考えることができる生徒のことである。

副主題における「納得できる根拠」とは、「主張」「事実」「理由づけ」が、誰もが納得するように適切に結びついている、いわゆる「三角ロジック」でいうところの「事実」と「理由づけ」の2つをいう。「三角ロジック」とは「主張」「事実」「理由づけ」の3つを区別し、この3点を意識して考える方法である。「事実」とは表現内容そのもののことであり、「主張」とはその表現内容から読み取った自分の考えのことであり、「理由づけ」とはどのようにしてその「主張」が導き出されるのかの説明のことであり、したがって、「納得できる根拠をもとにつくる」とは、このような根拠をもとにして「主張」を行うということである。また、「ディベート活動」とは、一つの出来事に対して肯定側、否定側に分かれて意見を戦わせる話し合い活動のことである。鳥越謙造氏は『問題解決力を高める教室ディベート』において、「教室ディベートは、生徒による共同的な学習に基づいて、思考力、判断力、表現力等を駆使しながら論争的対話を展開し、問題解決の力を育む(問題解決学習)」と述べている。

3 研究の目標

国語科の「読むこと」の学習指導において、生徒が自らの考えをより深めることができるようにするため、ディベート活動という話し合い活動の場を、どのように設定すれば効果的かを明らかにする。

4 研究の仮説

2年生の国語科における「読むこと」の学習指導において、肯定側、否定側両方の根拠を考えるワークシートを用いてディベート活動を行い、それぞれの考えを深めれば、自分が文章や表現内容から読み取った一つの出来事に対して、「なぜこのような意味になっているのだろうか」や「これは本当にこのような意味なのだろうか」と色々な方面から考えることができる生徒になるであろう。

5 仮説検証の内容と方法

(1) 検証の対象 小郡市立大原中学校 第2学年2組 (男子17名、女子18名)

(2) 検証の方法・内容

国語科における「読むこと」に関する授業において、ディベート活動の場を設ける。そして、次の事柄に関して分析していく。

①ディベート活動において、興味・関心をもって取り組むことができたか。

本研究の手だてにおいて、ディベート活動が重要になってくる。その話ディベート活動に、興味・関心をもって意欲的に取り組むことができたかを、「ディベート活動振り返りシート」で分析する。

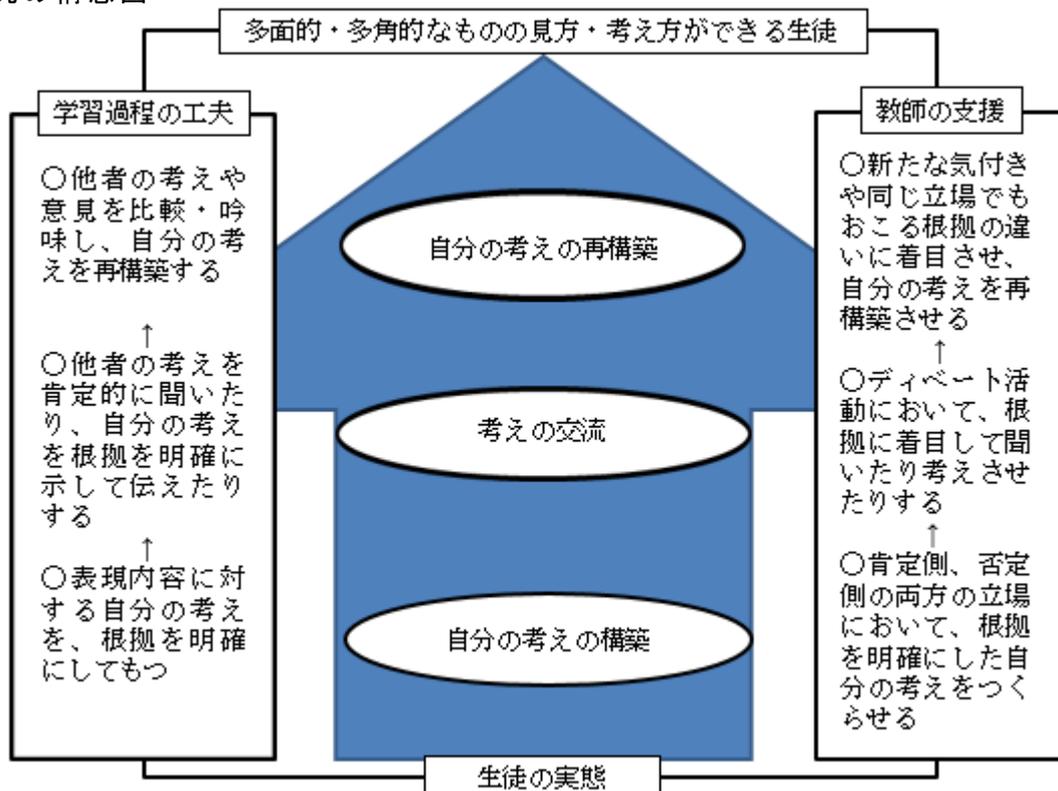
②ディベート活動によって、一つの出来事に対して「なぜこのような意味になっているのだろうか」や「これは本当にこのような意味なのだろうか」と色々な見方をすることができたか。

「ディベート活動振り返りシート」のディベートに取り組んでの感想欄に「違う立場の考えに納得できた」や「自分たちの立場の考えをしっかりと説明できた」などの記述があるかということをもとに分析する。

6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5月	研究主題の吟味・設定	10月	検証授業①・仮説の修正
6月	研究主題の吟味・設定	11月	検証授業②
7月	生徒の実態調査・研究の構想	12月	研究のまとめ・報告書作成
8月	研究の構想・仮説の設定	1月	研究のまとめ・報告書作成
9月	教材研究	2月	研究報告

7 研究の構想図



8 研究の実際

【実践事例1】

(1) 単元「平家物語『敦盛の最期』」

(2) 本時の指導にあたって

生徒は前時まで、現代語訳をもとに敦盛と直実の人物像をつかみ、敦盛を殺すに至った直実の心情の変化を捉えている。また、敦盛を殺すという直実の判断に対する自分の考えをもっている。

そこで本時では、直実の判断に対する他者の考えを聞いて、自分の考えを練り直すための考えをつかむことができるようにする。そのために、ディベート活動を用いて学級全体で交流をする。ディベーターとして考えを戦わせる立場と、聴衆として意見を聞く立場とに分かれて行う。ディベートの流れを記録させておくことで、自分が一番納得できる根拠をもとにして、自分の考えを練り直させていきたい。

段階	学習活動・学習内容	具体的な支援	評価の観点(方法)	
つかむ	1 本時の内容を確認する。 (1) 漢字テストを行う。 (2) 前時の振り返りをする。 ・ディベートの準備として、肯定側と否定側のそれぞれの意見を考えた。			
／	めあて ディベートに挑戦して、他者の意見を聞いてみよう。			
さぐる	2 ディベートの最終準備を行う。 (1) それぞれの立場において、最終確認を行う。 (2) 記録用紙の説明を聞く。 ・ディベーターが話している内容で、聞き取れたことを、メモ書きする。	○自分がディベートの最中に何をすればよいか明確にさせるために、黒板にそれぞれの立場のすることを掲示する。 ○ディベートの流れを把握させるために、黒板に流れの説明を掲示する。		
／	3 ディベートを行う。 ・論題「直実は敦盛を助けるべきである」 ・肯定側立論→否定側質問→否定側立論 →肯定側質問→否定側反駁→肯定側反駁 →否定側最終弁論→肯定側最終弁論 ・記録用紙にディベーターが話している内容をメモしていく。	○ディベートの流れを把握させるために、黒板の流れの説明を用いながらどの時間なのかを確認する。 ○スピーチ時間を有効に使えるようにするために、適宜ディベーターにアドバイスをする。	・ディベート活動を通して、登場人物の判断に対する自分の考えの根拠となる事柄をつかもうとしている。(記録用紙)【読むこと】	
深める	4 ディベート活動から、本時のまとめをする。 ・ディベートを行う中で、自分が一番納得する根拠を聞くことができた。	○考えを練り直すための根拠をつかんだか確認するために、記録用紙のメモの中で一番納得した考えに印をつけさせる。		
／	まとめ 1つの考えに対して根拠となる事柄は多様である。それらの中から自分の考えにあう根拠を選んでいくことが大切である。			
まとめる				

(3) 指導の実際

○今回のディベートの流れ

今回のディベートは、肯定側立論（2分）→否定側質問（2分）→否定側立論（2分）→肯定側質問（2分）→否定側反駁（3分）→肯定側反駁（3分）→否定側最終弁論（3分）→肯定側最終弁論（3分）で行った。最終弁論までは、作戦タイムを3分間それぞれの時間の前に設けた。事前に立論の内容を各個人で考えていたものを、ディベーターに配布して立論にどの内容を使うのかを考えさせておいた。また、初めてのディベートだったので、どのように話せばよいか、話し方の原稿を渡しておいた。

ディベーターが立論、質問、反駁、最終弁論を行うのに対して、聴衆は聞く側になりしっかりと記録用紙を取ることに徹した。

○さぐる段階

ディベーターはこの時間に最終打ち合わせを行った。(写真1)ディベーター全員がそれぞれの時間に何を話すのかの内容確認及び点検作業を行っていた。

聴衆は、隣同士でどのような議論が出てくるのか予測し、話している姿が見られた。

○深める段階

肯定側立論からディベートを始めた。ディベーターが話していることを、皆が記録用紙にメモをしていった。立論に対して質問したことをもとに、反駁をしている様子があった。作戦タイムには、寄り集まって次にどのように話すのか、皆でその話す人のために考えている姿があつ。(写真2)また話している途中に、同じ立場の人が助言をしている様子もあつた。最終弁論では両方の立場の意見をまとめて話すように指示していたが、難しかったようで上手くまとめて話すことができていなかった。

聴衆はディベーターが作戦タイムを取っている間に、その前の時間で話されていた内容を隣の人と確認している姿が見られた。「もっとこう話せばいいのに」という声や、「意味が分からなくなった」というような声が聞こえてきた。

○まとめる段階

本時の最後で、自分が一番納得できる立論の意見に印をつけさせた。ほとんどの生徒が迷わずに印をつけていた。

次時において、ディベート振り返りシートを書かせた。



【写真1 最終打ち合わせの様子】



【写真2 話す内容を決めている様子】



【写真3 ディベートの様子】

<ディベーター>

- ・言いたいことをすぐにまとめてきちんとした言葉に直して発表するのは難しかった。
- ・ディベーターとしてやってみて、相手の意見を聞いて、そこから次に話す内容を組み立てていくのは難しかったけれど楽しかった。

<聴衆>

- ・私はディベートをするにあたって、どちらとも意見が分かるのでとても楽しいなと思いました。特に私は、否定の意見しか思いつかなかったので、このディベートを通して肯定側の意見にも、なるほどと思ったので、よかったなと思いました。
- ・ディベートを見ていて、あまり皆が気づかない視点で質問したり、答える人もその質問に応じた答えを考えたりしていてよかったと思います。
- ・ディベートをしている人たちと、それを聞いている人たちと一緒に考えていることができるのがディベートのいいところだと思いました。

初めてディベートに挑戦をしてみて、難しかったと感じるだけではなく、楽しかったと感じることができていた。また聴衆側も様々な意見を聞くことができて、よかったと感じていた。しかし、聴衆は本当に聞くことしかしていなかったため、聴衆からも質問をしてみたいという意見も出ていた。

【実践事例2】

(1) 単元「漢詩の世界」

(2) 本時の指導にあたって

生徒は前時まで、漢詩を読み、その形式や押韻を確認したり、内容について読み取ったりしている。また、表現の特徴である自然の表現について、なぜ自然の表現を用いているのかに対して自分の考えをもっている。

そこで本時では、詩に自然の表現を用いることに対する他者の多様な考えを聞いて、自分の考えを練り直すのに必要な根拠をつかむことができるようにする。そのために、ディベート活動をして学級全体で交流をする。ディベーターとして考えを発表する立場と、聴衆として質問をする立場とに分かれて行う。ディベートの流れを記録させておくことで、自分が一番納得できる根拠をもとにして、自分の考えを練り直させたい。

段階	学習活動・学習内容	具体的な支援	評価の観点(方法)
つかむ	1 本時の内容を確認する。 (1) 前時の振り返りをする。 ・ディベートの準備として、肯定側と否定側のそれぞれの意見を考えた。		
／ さぐる	2 ディベートの最終準備を行う。 (1) それぞれの立場において、最終確認を行う。 (2) 記録用紙の説明を聞く。 ・ディベーターが話している内容で、聞き取れたことを、メモ書きする。	○ディベートの流れを把握させるために、黒板に流れを掲示する。	
／ 深める	3 ディベートを行う。 ・論題「詩を作るときに自然の表現を使うべきである」 ・肯定側立論①→否定側質問①→否定側立論①→肯定側質問①→肯定側立論②→否定側質問②→否定側立論②→肯定側質問②→肯定側反駁→否定側反駁→肯定側最終弁論→	○ディベートの流れを把握させるために、黒板の流れを示している掲示物を一つずつ取っていく。 ○スピーチ時間を有効に使えるように、適宜ディベーターにアドバイスをする。	

<p>／</p> <p>ま と め る</p>	<p>否定側最終弁論 ・記録用紙にディベーターが話している内容をメモしていく。</p> <p>4 ディベート活動から、本時のまとめをする。 ・ディベートを行う中で、様々な考えを聞くことができた。</p>	<p>○考えを練り直すのに必要な根拠をつかんだか確認するために、記録用紙のメモの中で一番納得した考えに印をつけさせる。</p>	<p>・ディベート活動を通して、論題に対する自分の考えの根拠をつかもうとしている。(記録用紙)【読むこと】</p>
<p>まとめ 1つの意見に対して根拠となる事柄は多様である。それらの中から自分の考えにあう根拠を選んでいくことが大切である。</p>			

(3) 指導の実際

○今回のディベートの流れ

今回のディベートは、全員がどちらかの立場に分かれ、肯定側立論（2分）→否定側質問（3分）→否定側立論（2分）→肯定側質問（3分）→肯定側立論（2分）→否定側質問（3分）→否定側立論（2分）→肯定側質問（3分）→肯定側反駁（3分）→否定側反駁（3分）→肯定側最終弁論（3分）→否定側最終弁論（3分）で行った。それぞれの質問の後に、作戦タイム3分間を設けた。また、質問をするのを聴衆の役割とした。したがって、今回はディベートの前に1時間とって、ディベーター、聴衆を含めた全員が自分の立場の立論を把握できるように共有させた。また、2度目のディベートだったので、話し方の原稿は渡さなかった。

○さぐる段階

今回は全員が発表者として参加する形式だったので、自分の立場の全員で最終確認を行った。しかし、やはりディベーターが中心となって話しているだけで、他の質問をする聴衆の人たちはどのような話があるだろうかという受け身の姿勢であった。

○深める段階

肯定側立論からディベートを始めた。今回は立論が2回あったので、2回に分けて自分たちの意見を出していた。質問の時にはディベーターが質問したいことを、メモして聴衆に渡して質問してもらおうという方法を取っていた。

ディベーターと聴衆が立論や反駁、質問の時間に相談している姿が多く見られた。事前の打ち合わせの時間が足りていないように感じられた。



【写真4 ディベートの様子】

○まとめる段階

今回もディベート振り返りシートを書かせた。

<ディベーター>

- ・今回はディベートをする方でやってみていろいろと自分の意見が言えたからよかった。
- ・質問の時にとまどってしまったから、もしディベーターをするならばハキハキと質問に答えたい。
- ・相手の意見を聞いて自分の言うことを考えるのが難しかった。

<聴衆>

- ・聞く側も質問とかして参加できてよかった。
- ・前回に比べて、みんなよく発言したり考えたりしてよかったなと思いました。私も実際に考えることができ理解することができたので、よかったなと思いました。
- ・質問も楽しいけれども、立論もやってみたいと思った。でも質問も本当の会議のようでおもしろかった。
- ・ディベーター以外の方が質問することで、たくさんの意見が出ておもしろかったです。

質問を聴衆が行うという形式にした結果、皆が前回のディベートよりも参加していたと感じている人が多かった。しかし、質問する時間に質問内容を考える人が多く、質問の時間の前に作戦タイムを設定する必要があると考えた。そうすることによって、聴衆も質問がしやすくなるのではないかと考えられる。また、ディベーターが聞いてほしいことをメモして渡していることに対して、自分たちもそのようにすればよかったという意見もあった。

9 研究の成果と課題

(1) 全体考察

2回の実践を通して、生徒たちのディベート活動に対する意欲が高まってきた。最初は、ディベーターをしたくないという者がほとんどで、なかなか決まらなかったのだが、2回目のディベート活動のときには自らしたいという者が多くなっていた。1回目のディベート活動を通して、ディベート活動のおもしろさを生徒自身が感じることはできなかったからではないかと考える。また、学年全体でディベート活動をしたいという意見もあがった。このように意欲があがってきた要因は、ディベート活動が自分が思いつかなかった根拠を聞くことができるということだと考える。振り返りシートの中にも、自分が思いつかなかった意見に納得できたという感想があった。したがって、ディベート活動は本研究の手段として効果的であったと考える。

(2) 研究の成果

- ディベート活動をすることで、生徒たち自身が協力して色々な根拠を探ることができていた。
- 相手の根拠の正当性について、「本当にそうだろうか」と疑問をもって考えることができていた。
- ディベート活動に対する意欲があがったことにより、自分の意見を言うことに対して抵抗感が少なくなってきた。

(3) 研究の課題

- ディベーターの生徒が主に発言をするだけであったので、受け身になっている生徒がいた。そのような生徒を、どのようにしてディベート活動に積極的に参加させていくか、考えていく必要がある。
- どのように論題を設定するかを吟味する必要がある。単元の内容にも関連し、かつ、子どもたちの考えたいという意欲をわかせる論題を設定していきたい。
- 準備や実際のディベート活動、まとめなど、授業時数の確保が必要になってくる。いかに効率よく準備をするのかを、考えていく必要がある。

10 参考文献

- ・学習指導要領解説 国語編（文部科学省、2017年6月公示）
- ・現代の国語1（三省堂、2016年3月30日初版発行）
- ・問題解決力を高める教室ディベート 主体的・対話的で深い学びを実現するために（鳥越謙造著、2016年11月1日初版発行、学事出版株式会社）
- ・無藤隆が徹底解説 学習指導要領改訂のキーワード（無藤隆解説、馬居政幸・角替弘規制作、2017年4月初版第4刷刊、明治図書）
- ・平成29年版 中学校 新学習指導要領ポイント総整理（東洋館出版社編集部編、2017年6月28日初版第1刷発行、東洋館出版社）
- ・中学校国語科 単元を通して課題解決をめざす言語活動プラン15（富山哲也・杉本直美編、2015年10月27日初版第2刷発行、東洋館出版社）
- ・二瓶弘行と国語“夢”塾の「対話授業づくり 一日講座」（二瓶弘行編著、2015年1月第4刷発行、文溪堂）